

HAREM CASINO

ハーレムカジノ



竹内けん
挿絵 SAIPACo.

試し読み版

ハーレムシリーズの世界





● グリンカムピ
ナウシアカ

● フェンリル

ターラキア山脈

● ベリージャム

シウルビー

サイアリーズ

フレイア

● カプス

● エバーグリーン ● エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● レヴィ

● ライオネル

クラナ

ヒューリアス

● ● ガラデア

カーリング

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

● ビーナス

メリシャント

樹海

● アヴァロン

オルシ

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

シエルファニール

イシュタール

● セビュア

● シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

ランチェロ

ローランス

● ラリマール

● マルタ

● カルロッタ



CHARACTERS

登場人物紹介



♠ グレイ

『錦屋』タプロを親父と慕う青年。
スーツにサングラスで見た目は
いかつい男。
好きな飲み物はマティーニ。

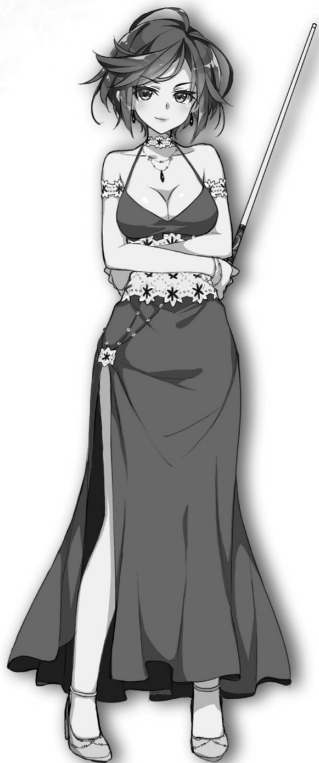
♥ ヴェーゼ

父に内緒でバニーガールのバイトを始め
たちょっと抜けてる女の子。世間知らず
だが愛嬌はある。でもやっぱりおバカ。
好きな飲み物ハイボール。



● アネモネ

『ラヴィアンローズ』でディーラーをする至極真面目な少女。貧しい農業生活から華やかな世界へ来た理由とは。好きな飲み物アップルジュース。



◆ デシャネル

ここ最近カジノに出入りしているという謎の美女。素性は知れないがビリヤードの腕は一流でどうも武術にも長けている様子。好きな飲み物はゴムレット。

第一章	不夜城
第二章	カジノの裏側
第三章	幸運の女神
第四章	VIPルーム
第五章	イカサマ
第六章	闇の帝王

左手で乳房を揉みながら、右手で赤い布地に包まれた肉溝を撫でてやる。

「ほう、そこダメえ〜〜」

薄い布地越しとはいえ、熱く湿っているのが分かった。濡れやすい体質のようである。熱い吐息を漏らすウサギ娘を、グレイは嘲笑した。

「レオタード越しにも、クリトリスがぷっくり膨らんでいるのが分かるぞ」

「そ、そんな……」

「こんな衣装だと、このでかいクリトリスを晒して歩いているようなものだぞ」

グレイの言葉責めに、ヴェーゼは項^{うなじ}までピンク色に染めて、ピクピクと痙攣する。

（淫乱というか、ドマゾだなこいつ。まったく、バカな子ほどかわいいというのは本当だな）

グレイから見ると、ヴェーゼは仕事場の近所に住む娘というだけに過ぎない。

屯所にいるとき、にこやかに挨拶をして通り抜ける気のいい娘さんで、何度か、母親が作りすぎたとかいう料理のおすそ分けを持ってきてもらったことがあるくらいの関係だ。

学校を卒業した後も、定職に就くでもなくふらふらしているさまを心配していたが、それはあくまでも近所の大人の視点というものでしかない。

もし、グレイの知らぬ間に、水商売の女として、落ちるところまで落ちたとしても、普通に近隣住人として温かく見守っていただろう。

しかし、たまたま墮ちる過程に遭遇してしまったがゆえに、バカな娘だと思いつつも、保護欲をそそられる。

そう当初は純粋な庇護欲に過ぎなかった。甘ったれた不良娘に少しでも世間の厳しさを教えてやろう、という意図で始めたのだが、そのエロすぎる肢体に触っているうちに、理性が暴走していることを否定できない。

グレイはついに、右手の人差し指をレオタードの右の足穴から入れてしまった。

「はうろう」

「ん？」

違和感を覚えたグレイは、指を上下させた。濡れてヌルヌルしているが、つるつるとした肌触りだけが指に伝わってくる。

グレイの軽い困惑を、ヴェーゼは察した。

「ど、どうしたの？」

「毛がないな、と思ったただけだ。おまえパイパンだったんだな」

はっとしたヴェーゼは、恥ずかしそうに俯きになり、小さな声で告白する。

「あ、そ、それは……あの、自分で剃った」

「はあ？」

驚くグレイに、ヴェーゼは自棄やけになって説明する。

「いや、だから、こういう恰好して、ハミ毛とかしたら恰好悪いなあって思つて」

「なるほど、自分で剃つちまったのか。さすが淫乱娘らしいな」

「うー、身嗜みみだしなの問題であつて、淫乱とは関係ないから！」

自分でもやりすぎたと思つているのか、ヴェーゼは歯切れ悪く反論する。

「たしかにこういう恰好をする以上、パニーガールたちはみんな剃っているだろうな」
「でしよでしよ」

「でも、全部剃つちまうようなバカはおまえぐらいだ。この淫乱娘」

グレイは勃起している大振りの陰核をギユツと摘み上げた。

「あ、ダメエーッ、そんなに、そこ直接弄られたら、ああッ」
プルプルプル……。

ムッチムチの身体が、激しく痙攣している。再びイってしまったようだ。

ぐったりと脱力するヴェーゼがしゃがみ込まないように、後ろから抱き抱えながら、グレイは舌なめずりをする。

(さて、そろそろ入れごろだな)

というよりも、グレイのほうが我慢できなくなつていた。

この美味しそうなウサギ肉を、ペロリといただいてしまいたい狼の本能を抑えられない。
ズボンの中から逸物を取り出す。

プルンと唸りを上げるがとき逸物は、まさにウサギを射抜くやぶ。

「ひいい」

狼がいよいよトドメを刺しに来たということを察したヴェーゼは、後ろ手に見下ろして怯えた悲鳴を上げる。

「やだ、なにそれ、気持ち悪い」

「気持ち悪いは失礼だな。それでも女の扱いにはちよつとした自信があるんだぜ」

なにせ口入れ屋の丁稚として育つたのだ。

マニアなお姉さまたちにさんざん、つまみ食いされて育つた。

ちなみに同じような立場で育つたロンが、まったく女にモテずに困っているのは、口入れ屋のお嬢様カリンが睨みを利かせている影響だろう。

マニアなお姉さまたちも、カリンには遠慮しているのだ。

「ほら、覚悟を決めな。こんなところで働いていたら、遅かれ早かれ、おまえの言うところの気持ち悪いものをぶち込まれることになるんだぞ」

蟹股に太腿を開き、後方に突き出されたでっかい尻を包む赤いレオタードを脱がすとなると大事なので、その股布だけを左にぐいと避ける。

なかには網タイツがあった。下着は穿いているようだ。バニーガールの衣装に、透けたり、はみ出したりしたらみっともないということだろう。

(網タイツだけを脱がすのは不可能だな)

そう判断したグレイは、網タイツの穴の一つに、指を入れて強引に押し広げる。

(よし、これなら入れられるだろ)

広げた穴に逸物を押し込む。

切っ先が熱いマグマのようになっていて蜜壺に触れた。

「入れるぞ」

「あ、ダメ、それだけはダメ、お父さんに怒られちゃう！」

「なにいまさらカマトトぶっているんだ。この不良娘」

必死に抵抗する娘に向かって、グレイは情け容赦なく逸物を押し込んだ。

ズブッ！

「はっぎゃ〜〜」

股から肉矢で射抜かれたウサギ娘は、なんともみつともない断末魔の悲鳴を上げた。

温かくザラザラとした贅肉が、肉棒にみっちり絡みついてくる。それを押し分けて強

引に進む。

(くっ、きついな。ヤリマンのくせに)

予想以上に締まる膣洞に驚きながらも、最深部にまで押し込む。

「ふ、太い。大きい、長い。はう、奥まで届いた。奥までゴリゴリ届いているうう」

串刺しにされたウサギ娘は、まるで股から入った逸物が腹を通って、口から抜けるというかのように、のけぞって大口を開けた。

被虐感たっぷり娘の痴態に、男は否応なく征服欲を刺激させる。

(ヤバ、止まらん)

お仕置きだというのに、すぐ出してしまったのでは、男の威厳もなにもあったものではない。

襲い来る射精欲求を必死に我慢しながら、グレイは逸物の抽送を開始した。

パン！ パン！ パン！

あくまでも能天気なバカ女に、男の怖さを教えてやろう、という意味でのセックスである。

楽しむつもりはなかったのだが、肉体的な快楽は平等であった。

(さすがは遊び人、いいオマ○コしているぜ)

ムッチムチの肢体にふさわしいムッチムチの膣洞に魅せられたグレイの腰使いはどんどん激しくなる。

ドスッ！ ドスッ！ ドスッ！

「あっ、痛い。痛いよお、優しく、優しくして、あう、あう、あう」

両手で壁にしがみついたヴェーゼは、だらしなく蟹股に開いた太腿をプルプルと振るわ

せながら、男の容赦ない獣欲に晒されて、涙を流し、だらしなく開いた口元から涎を垂らす。

グレイとしても乱暴すぎるとは思った。普通ならじつくりとクンニしてから入れるべきなのに、このような場所ではそんな余裕はない。

とはいえ、相手は遊び人の淫乱娘である。慣れているだろう。こういう娘は、少々乱暴に扱ったほうがいいように感じた。

「もう、らめえええ〜」

「いくぞ」

ヴェーゼが力尽きたのを察したグレイは、逸物を思いつきり押し込んだ。

亀頭部にコリコリとした軟骨のような子宮口を感じながら、射精する。

ドビュ！ ドビュツ！ ドビュユユユユユ!!!

「キヤイーン！ 熱い！ すごい熱いの、熱いの入ってくるううう！」

ヴェーゼは大きな両目から、ポロポロと大粒の涙を流しながら、口元から涎を噴き出しながら啼泣した。

「ふう……」

思う存分に射精して満足の溜息をついたグレイは、小さくなった逸物を引き抜く。



「大きさと魅力は別物だよ。アネモネのおっぱいはとっても魅力的だ」

恥じ入る乙女のブラジャーを上に取り上げて、小さな膨らみを手にとる。掌にすっぽりと収まってしまふ大きさだ。

揉み応えという意味ではあまりないが、それでも柔らかさは感じる。

「ああ……」

異性に乳房を弄ばれて、純情娘は身体を固くする。グレイは野イチゴのように赤い乳首を指で摘むと、クリクリと弄ぶ。そうしているうちに、小さな膨らみのいただきで、乳頭だけはかなりツンと長く突起した。

(あらあら、敏感なおっぱいだこと)

微笑したグレイは、勃起した乳首をさらに執拗に弄り倒す。女の乳首は勃起してからが本当の性感帯だ。

「ああ、そんな恥ずかしい……」

「大丈夫。俺に任せている」

「はい……」

羞恥に顔を赤くしながらも、グレイに身を委ねてくる。

辺りには竖琴奏者の奏でる上品な音楽。そして、遠くで盛り上がる人々の歓声は、デシヤネルがピリヤードの試合をしているのだろう。

そんななか、グレイは乙女の身体を使ったひそかな演奏を楽しむ。

上体をうつ伏せにして、しこり立った左の乳首を口に含む。

コリコリと弾力ある長い乳首を舌で転がしながら、左手をアネモネの下半身へと下ろしていき、ローライズのタイトパンツの腹部から手を入れる。

「うぐ……」

アネモネは両手で口元を押さえた。

羞恥に必死に耐える少女の股間に入れた指には、つるつるとした陰毛が絡まってくる。

本数は少ないのだが、一本一本は太い剛毛だ。

(陰毛が濃い女は情も濃いというからな。それにトロットロだ)

陰毛を梳くしりながら指をさらに下ろし、肉裂を人差し指と中指と薬指で塞ぐ。

ぷっくりとした肉感が掌に伝わってくる。

いわゆるモリマンというやつだろう。女は若いほどに恥骨が張り出しているものだ。

ゴシゴシゴシゴシ……。

女性の入口を前後にこすり上げる。

「あつ、あつ、あつ、あつ……」

男の膝の上に横になった乙女は、背筋を弓なりに反らせて悶絶する。

肉裂からトロトロと温かい蜜が溢れてきて、指を濡らす。

掌にコリとしたしこりの存在を感じた。小柄な体躯の割には大粒でしつかりとした甘栗のようなクリトリスだ。そこを包皮ごとギョツとつまんでやる。

「はう！」

女の急所を捉えられたアネモネは、身を固くしたかと思うと、ピクピクと痙攣した。男の膝の上で絶頂した少女を、優しく気遣う。

「大丈夫か？」

「はい。すぐ気持ちよくて、ふわっとなりました」

イキ顔を男に見られたアネモネは恥ずかしそうにはにかむ。

「そうか。いい濡れっぷりだからな」

愛液に濡れた指を、眼前に翳してやると、アネモネはあわあわと動揺する。

「ご、ごめんなさい……」

「謝る必要なんてないさ。よく濡れるというのはいい女の証だぞ。ほら、舐めてみる」

適当なことを言ったグレイは、愛液に濡れた指先を、アネモネの唇へと添えた。アネモネは赤ん坊が母親の母乳でも欲するかのように、愛液に濡れたグレイの指をしゃぶり始めた。

ジュルジュルジュル……。

グレイの指は、上顎の縫い目を優しくなぞる。

「ふむ……」

指をしゃぶりながら、グレイの顔を見つめるアネモネの顔は蕩けきってしまった。
(うわ、ほんと俺のことを信用しきってしまった、という顔だな)

まさに騙したい放題だ、などと考えていると、アネモネがおずおずと申し出た。

「あの……先ほどから、その……お尻に硬いものが……」

「ああ、アネモネが魅力的だからな。おちんちんがガンガンに硬くなっちゃまっているよ。見てみるか？」

グレイはアネモネを腹部側に抱き寄せると、逸物を取り出した。

アネモネの左腰骨あたりに、杭のようにニョキッとそそり勃つ。

「っ！」

逸物を見下ろしてアネモネは目を瞠る。

「怖いか？」

「いえ、実は弟たちをよく風呂に入れてあげていたから、おちんちんは見慣れているつもりだったんです。でも、師匠のおちんちんはすっごく大きくて、かつこいい。その、なんというか、……素敵だと思います」

「そうか、触ってみてもいいぞ」

率直に称えられて気恥ずかしさを覚えたグレイに促されたアネモネは、左手を恐る恐る

伸ばして、いきり立つ逸物を手に取った。

「あ、温かい。それに大きくて、硬くて、ドクドクいつていて、ああ、これが師匠のおちんちんなんですわね」

顔を真っ赤にしたアネモネは愛しげに肉幹を扱く。そして、グレイに訴える。

「師匠のこのおちんちんで大人にして欲しいです」

「分かったよ」

穢れた大人であるグレイには、アネモネの純朴さは眩しい。

田舎で育ち、両親に売られて、見知らぬ都会に出てきて、カジノで働いていたのだ。きつと親しい友人なども傍そばにおらず、心細い想いをしていたことだろう。

そんなときに少し優しくされて、簡単に男に騙されてしまったのだ。

（うわ、自分で仕掛けたことはいえ、すげえ罪悪感……）

しかし、ここで突き放すわけにもいかないだろう。なによりも、彼女の魅力にグレイのほうがクラクラしてしまっていた。

（俺の女にしたい！）

という性欲を止めることなど不可能だ。

欲望に突き動かされたグレイは、立ち上がりアネモネを、トランプの散らばったポーカー台の上に乘せた。

両手をアネモネの左右の膝の裏に乗せてM字に開かせる。

ズボンを脱がすのは面倒なので、ローライズなのをいいことに、腰の部分だけ下ろす。あらわとなった白い下着は、コットン生地で、かなり野暮つたい。またぐり部分は濡れて大きな沁みになっている。

それを太腿の半ばまで引きずり下ろすと、濡れた黒い陰毛に彩られた陰唇をあらわとさせる。

感触通り、本数は少ないのだが、一本一本が太い。

ズボンとパンツを半脱ぎにさせて、足を上げる。いわゆるマングリ返し状態で、陰唇を晒した形だ。

グレイは左右の親指を大陰唇に添えて、ぐいっと開いた。

「はぁん……」

自ら望んだ行為とはいえ、さすがのアネモネも羞恥心を抑えきれずに、不安げな吐息を漏らす。

赤黒い媚肉があらわとなり、ぷくんと初物ならではの、少々おしっこ臭い香りが漂う。いわゆる処女臭というやつだ。

陰核は大きめだが、分厚い包皮に包まれている。

「綺麗だよ。それにとっても美味しそうだ」

「あ、ありがとうございます」

火を噴きそうな勢いで、顔を紅潮させているアネモネだが、逃げようとはしなかった。暴かれてしまった乙女の花園の奥からは、トロトロと濃厚な蜜が止め処もなく湧き出してくる。

(まさに犯しごろってやつだな)

いまずぐ逸物をぶち込みたいという欲求に耐えながら、グレイは蜜に濡れた花卉を開いていき、ついには膣穴まで開いてしまった。

(うわ、予想はしていたが処女膜あるな。それもすげえ綺麗に残っている)

真ん中にポツンと穴が開いている。いわゆる原型といわれる形だ。

まさに蜜に吸い寄せられる蜂の如く、グレイは舌を伸ばすと、会陰部から船底を通って陰核まで舐め上げた。

「ひいあゝ……そ、そんなところ舐められるの、は、恥ずかしい」

「おまえ、初めてなんだろ。よく解しておかないと、後でつらいぞ」

「は、はい！　すべてお任せします！」

グレイに絶大な信頼を寄せてしまっているアネモネは、両手を握りしめて健気に頷く。それをいいことにグレイの舌は、乙女の秘部を隅々まで味わった。酸っぱくてしょっぱい。濃厚な蜜が男の喉を潤す。



「シン爺さん。俺はマティーニを頼む」

「あたしはギムレットをいただくわ」

カジノ『ラヴィアンローズ』を出たところで、ミリアとは別れた。

あの爺が煩いから、しばらく他の街に行く、とのことである。

グレイとデシヤネルは、錦屋系の酒場『水宝亭』にきていた。

さすがにあんな騒動を起こした直後に『ラヴィアンローズ』で飲む気にはなれない。

グレイは丸みを帯びたカクテルグラス、デシヤネルは逆三角形のカクテルグラスを手にとった。

「とりあえず、姉弟子救出おめでとう」

「ありがとう。協力感謝するわ」

カチンッ。

儀礼として軽く杯を合わせてから、二人はそれぞれ酒に口をつけた。

軽く足を組んだデシヤネルは、逆三角形のカクテルグラスの脚を持って自棄のように一

気に呷る。

(まったく酒を飲む姿も絵になるな)

いささか見惚れたグレイもグラスを傾けて、苦笑した。

※

「しかし、くだらんオチだったな」

「大山鳴動して鼠一匹。ミリア姐さんのことだから、こんなことだろう程度には覚悟していたわ」

カウンターに両肘をついたデシャネルは、思い出すのもバカらしいといった風情で溜息をついた。

「あれが噂のミリアか……ん？」

「どうかしたの？」

「いや、どこかで見たことがあるような気がしたんだ」

記憶をたどる 그레이 を、デシャネルは笑う。

「ミリア姐さんも錦屋を利用したことはあると思うわよ」

その言葉でピンときた。

「あっ……いや、なんでもない」

花流星翔剣の師範代ミリア。童顔の小悪魔と呼ばれる流浪の女剣豪には、一つの噂がある。

美少年や美少女が好きで、処女狩りや童貞狩りをするのが趣味だというのだ。

(ま、まさかね……)

그레이 の初体験は、錦屋に出入りする女傭兵だった。

物心ついたときに、半ば拉致されるように連れていかれ、精通させられた拳句に、舌がマヒするまで女性器を舐めさせられ、一晩かけて搾り取られたという結構なトラウマ体験である。

その後も、おつかないお姉さんたちの肉便器として好き勝手やられたものだ。

（あの中に、ミリアさんもいたという可能性はかなり高いってことか。いや、それより最初の一人……）

あまり考えたくない、という結論に達したグレイは、話題を変えた。

「ミリアさんの無事が確認できたから、おまえは郷に帰るのか？」

「そうね。なんだか名残惜しい気分にもなるけど、いつまでもカジノに入り浸っているわけにもいかないでしょ」

「では、帰る前にもう一勝負しようか？　ここでもビリヤードはできるぞ」

グレイがキューを取り出すと、デシヤネルは呆れる。

「あたし相手にビリヤードで勝てると思ってるの？」

「勝ち逃げされるのは気が済まないんでね。最後の勝負だ。金貨三枚でどうだ」

「うふふ、負けず嫌いね。負けを一気に取り戻そうと言うの。いいわ、金貨五枚なら受けてあげる」

デシヤネルの挑発に、グレイは即座に乗った。

「よし、その代わり、俺が勝ったら、今夜は俺の女になってもらうぞ」

「身の程知らずね。返り討ちにしてあげるわ」

ラヴィアンローズに潜入するための手段としてのビリヤードであったろうが、毎日遊んでいるうちに、すっかりハマってしまったのだろう。

いまや一端のハスラーだ。

いかにもギャンブルに熱くなって、周りが見えてない愚か者を見る蔑みの表情で同意した。

こうして始まった最後の試合。

当初は余裕だったデシャネルの顔から笑みが消えた。

「ちよっ、ちよっ……」

次々と吸い込まれていく玉の流れに、デシャネルは慌てるがもはや後の祭りだ。

グレイは情け容赦なく、一方的に玉をポケットに入れていく。

そして、最後の一つも消えた。

「負けた……っ!？」

呆然と立ち尽くすデシャネルに向かって、グレイは肩を竦める。

「そ、俺の勝ちだな」

「なんでよ。今までと全然違うじゃない」

食ってかかるデシヤネルに、グレイは象牙の玉を持ち、軽く接吻してからニヤリと笑う。「一つ教えてやろう。古今東西、ギャンブルにイカサマは付き物だ。ビリヤードにおけるイカサマの基本は、ヘタクソなふりをして序盤は負け続け、負けを返上するために賭け金を上げることが提案したのちに、本領を発揮して勝つというものだ」

「……」

デシヤネルは目を見開いて呆然と立ち尽くす。

「単純極まりない策であり、同じ相手に二度はできない。いざつてときの必殺技つてやつだな。いい勉強になっただろ」

同じイカサマでも、ルール違反のイカサマであつたなら、デシヤネルは抗議し、無効と騒ぎ立てたであろう。

しかし、純粹に勝負に負けたのだから、ぐうの音もでない。

「ということで、デシヤネル。約束は覚えているかな？」

「ああ、なんであたしがあなたみたいなヤクザものに」

デシヤネルは右手で額を押さえる。

「しかし、約束は約束だろ」

「ああ、分かったわよ」

グレイの念押しに、デシヤネルはヒステリー気味に吐き捨てる。

「あなたには何だかんだで世話になったからね。そんなにやりたいなら、い、一発ぐらい相手をしてあげてもいいわよ」

「ひゅ〜♪ そういう気風の良さ、好きだぜ」

口笛を吹いたグレイは、デシヤネルの腰を抱いた。

「それじゃ行こうぜ。俺の家はこの二階だ」

「えっ!？」

デシヤネルが戸惑っているうちに、グレイは自分の部屋へと連れ込んだ。

そして、扉が閉まったと同時に、グレイはデシヤネルを抱きしめて、唇を奪った。

「うっ、うむ、ふむ」

さすがにここまで来たら、デシヤネルにも嫌がるそぶりはない。積極的に楽しもうと唇を重ねてくる。

「う、ふむ、うん、ムチュ……」

男と女の舌が絡み合い、唾液を交換する。

グレイは両手を、デシヤネルの腰に回し、両手で左右の臀部を掴む。モミモミと尻を揉みながら、自らの高ぶりをデシヤネルの下腹部に押し付ける。

そして、そのまま寝台へともつれ込んだ。ここに至ってデシヤネルは強引に接吻を外す。「ちよつとがつつきすぎじゃない？」

「最近、ガキのお守りばかりでうんざりしていたんだ。今夜はいい女をがつつり食べさせてもらうぞ」

ドレスの上から乳房を揉まれたデシャネルは、身もだえながら懇願する。

「あつ、お願い。シャワー浴びさせて」

「駄目だ。我慢できない」

接吻しながら、グレイはドレスの肩紐を外し、胸を露出させる。

そして、両手で乳房を手に取り揉みはじめると、不意にデシャネルは接吻を解いて、睨んでくる。

「約束だから一発やらせてあげるけど。先に言っておくわ。一発やったくらいで、あたしのこと、自分の女にしたとか、勘違いしないでよね」

「分かっている。しかし、せつかくやるんだから思いっきり気持ちよくなりたいたら」

「ま、まあね」

デシャネルは薔薇色の頭髮を意味もなく整えながら頷く。

「任せておけ、もう俺のちんぼなしでは生きていけないくらい気持ちよくしてやるよ」

デシャネルにネッキングし、それから両腕を上げさせたグレイは、無防備に晒された腋の下を舐めた。

このような露出の激しいドレスを連日着ているのだ。ムダ毛の手入れも完璧らしく、腋



毛の痕跡すら感じさせないつるつるの肌触りだ。

しかし、若干汗ばんでいて、いい女のフェロモンが男を酔わせた。

左右の脇の下を存分に舐め楽しんで後は、いよいよ乳房へと移行する。

(でかいな)

同じ巨乳でも、ヴェーゼの場合は、駄肉と言いたくなるのだが、デシヤネルの場合は、まさに極上の肉だ。

(では、いただきます)

両手で左右の乳房を根元から持ち上げつつ、いただきますを飾る赤い乳首を二つ口に含む。

「ちょ、いきなり左右同時って、ああ……」

両の乳房を揉みしだかれ、乳首を吸われたデシヤネルは両腕を上げた状態で大いに乱れた。

両の乳首はビンビンに硬くなり、乳頭はニョキッと起ちあがる。

「ああ、そこ、そんなに、強く吸われたら、ああ、ああ、ああ……」

成人した大人の女である。まさに今が旬といった食べごろの身体は、実に感度がいい。執拗に乳首を吸われたデシヤネルは、乳首責めだけでイってしまった。

「ふっ、いい女はイキ顔も美しいな」

カァァ……！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ジェノバ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルはわからない
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



女刑事美優

美優は自慢の肉体で

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!!



異世界で
手に入る
ドキドキクラブな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫